

## リンコ・ツジムラの成長物語(1)：

### ヨシコ・ウチダの『夢をかなえる壇』

渡 辺 佳 余 子

日系二世のアメリカ文学作家の中で、最初の専業作家と言われている<sup>1)</sup>ヨシコ・ウチダ（内田淑子）は、1949年に『ぶんぶく茶釜』（日本の民話を英語で書きなおしたもの）を発表後、29冊の児童文学書、4冊の大向け作品を出している<sup>2)</sup>。この中には、『茶釜』に類似した題材を取っているもの、ウチダ自身の強制収容所での体験を綴ったもの、そして、ウチダの両親を含む日系一世の体験を描いたものなどが含まれる。これらの作品群の中では、11歳の日系二世少女Rinko Tsujimuraの一人称語りで、アメリカに生きる日本人や日系人の姿が生き生きと描かれる、リンコものと呼べる三つの作品が特に優れているように思える。このことは、三作品ともがCalifornia Commonwealth Club賞、American Library Association Notable Book賞、Bay Area Book Reviewer賞を受賞したことにも示されているといえよう<sup>3)</sup>。

リンコ三部作に描かれている時代は1930年代半ばである。したがって、日系人たちにとって、悪夢のような強制収容所での体験に関する逸話は語られていない。日系作家の役割は、収容所体験を描くことであるという風潮もあるためか、ウチダも、児童向けと大人向け両方の自伝や、リンコと同年齢の少女ユキが登場するユキ二部作 (*Journey to Topaz*と*Journey Home*)、そして、長編『写真花嫁』において、収容所体験を主要なテーマとして描いている。時代設定上、リンコ三部作には、それが描かれていない。このことは、作者が語らなければいけないことという呪縛から解放され、リンコものに自由な空間を与えることができたように思われる。そして、読者は、少女リンコが生き生きと語る、素直で率直な世界に魅了される。

一方では、リンコという無垢な少女が、日本人や日系人に対する悪質な差別を語ることから、アメリカ白人たちの非寛容な姿が一層鮮明に浮かびあがる。リンコ三部作に登場する日本人一世や日系人二世たちは、このような差別に対しても勇敢に立ち向かい前向きに生きていくこうとする。しかし、この時代の数年後には、彼らが強制収容所に移送されるという歴史的事実が待ち受けている。そのため、このことによって、読者は、彼らがひたむきにアメリカの社会で受け入れられたいと努力する姿に深く心を動かされる。

本稿では、このリンコ三部作のうち、第1作目の*A Jar of Dreams* (1981) を取り上げ、リンコの成長する過程を分析したい。

#### 1. 日本人と日系人への差別

リンコは、カリフォルニア州バークレーで父、写真花嫁として父に嫁いだ母、大学生の兄Cal (California)、9歳の弟Jojiの5人家族で暮らしている。父は理髪店を経営、母は白人女性Mrs. Phillipsの家事手伝いをし、豊かではないが愛情に満ちた幸福な家庭生活を送っている。素直で明るいリンコではあったが、意地の悪い白人でクリーニング店の経営者、Mr. Wilbur J. Starrの存在に怯えていた。彼が、リンコや弟が彼の家の前を通ると “Get outta here you damn Jap kids!”<sup>4)</sup>

と大声で罵ることから、リンコは彼の前を通らないように気をつけていた。リンコは、スターから「ジャップ」と怒鳴られるたびに自分が感じる気持ちについて「すごく嫌だ」と分析する。これは、彼女が、スターへの怒りに加えて、自分には全く「いいところがない」("no good")と思えてきて、その上、自分を恥ずかしい存在だと感じ、自分が消えてしまいたいとさえ思うことにある。

このスターへのリンコの気持ちはさらに、ほとんどが白人学生である学校のクラスメートからの差別を思い起こさせる。男子学生の中には、スターのようにリンコを「ジャップ」とからかう者もいるが、彼女は、女子学生の数名から全く無視されることのほうが気になるのだ。このときも彼女は、自分が少しも意味のない存在 ("a big nothing") に思える。そのため、リンコは、自分の黒い髪や日本人の顔をひどく嫌になり、白人にとって発音が難しくて覚えることが困難なリンコ・ツジムラという名前を持っていることさえ嫌になる。そのため、彼女は、「他の人達と同じになりたい」("I wish I could just be like everybody else.") (6) と心の底から願う。そのため、リンコは、両親から課せられている放課後の日本語学校への通学を虚弱体質が理由でしばらく休んでも良くなったときに喜ぶ。何故なら、この日本語学校通学が、他のアメリカ白人の子供たちとは、違うことを認識させるものだからである。

日本人一世の両親と、英語を流暢に話すアメリカ人でありたいと願う二世との葛藤は、ウチダの作品群の中で繰り返し論じられる。特に大人向けの『写真花嫁』では、主人公のハナと一人娘のメアリーの通い合わない心が描かれ、メアリーは自分の「日本的なもの」と完全に決別するために、大学を中退して白人男性と駆け落ち結婚をして両親を失望させる。リンコものでは、彼女がまだ11歳であることもあるって、あからさまに両親に反抗することはない。しかし、随所に、日系少女の周囲の白人アメリカ人と同じでありたいと切望する思いが散りばめられている。

母を愛しているリンコも、母が着物を着たりお辞儀を何遍もしたりするのを嫌う。例えば、リンコが、父の友人であるカンドおじさんを見舞に行くとき、母がおにぎりや魔法瓶を風呂敷に包むと、彼女は、紙袋に入れなおしてくれと要求する。何故なら、風呂敷を持って電車に乗ったら、皆が「日本からやってきた船から降りてきたばかりの人」を見るような目でにらむからなのだ。かつて、リンコが母親と外出した折、寿司とたくあんを風呂敷に包んで電車に乗ったとき、たくあんの匂いが余りにきつくて、他の乗客が二人を避け、運転手が電車の窓を全部開け放ったことをリンコは、忘れられない。このとき、彼女は恥ずかしくて座席の下に隠れて消えてしまいたいと思ったのだ。母もこの日以来、たくあんを持って電車に乗ることがなくなったことからも、リンコは、母が自分と同じように、乗客の意地の悪い表情を忘れるることはなかったのだと思う。

このように白人からの冷たい視線にさらされている日本人ではあったが、リンコの父は子供たちに夢を追うことをやめてはいけないと諭す。父の夢は、借金を返済したら洗濯屋をやめて修理工場を始めることがある。リンコの夢は教員になることだが、兄のカルは、「どこの公立学校でも、日本人の教員なんて雇わないさ」(8) と言い、「大学を出たらエンジニアになるんでしょ」と尋ねる妹に、「市場でキャベツやじゃがいもを売ることになるんじゃないかな」と自嘲的に答える場面がある。ここにも、一世が苦労して二世を大学に通わせて、結局は日系人への差別のために、彼らが学歴を生かした職業に就くこともできそうにない希望のない未来が描かれている。

差別は子供たちの間でもおこなわれている。リンコ三部作の生き生きとした語り手のリンコではあるが、学校では、全く別の人格になってしまう。教師から、教室では元気に発言するようにと促されたとき、学校における自分は「好きになれない」から、「相手から話しかけてくれなければ、他の人と話すこともない」(41) と考える。彼女は学校では、「押しつぶされた」「小さな」「本当の自分ではない」存在だと思うから、前かがみになって姿勢も悪くなってしまう。この学校で差別されていることについては、家族の誰にも、親友のタミにも、大好きな白人の隣人、シガーフ夫人にさえ言うことができない。11歳の少女がたった一人で差別に悩む姿を通じて、差別をすることがい

かに人を傷つけることになるのかが示唆されている。

いろいろな差別を体験するリンコにとって忘れることができないのは、タミとプールに泳ぎに行き、係員に入場を断られたときのことである。リンコは、困惑してその場から逃げてどこかに隠れたいと思ったのだが、タミは勇敢に「どうしてわたしたちはプールに入っちゃいけないの」と詰め寄る。しかし、係員は「あなたたちに入場券は売れない」と言い放ち、二人は帰宅した。同じ人間でありながら、日系人をプールに入場させないという屈辱的な仕打ちが、少女の気持ちに大きな打撃を与えたことは、このプールの逸話がウチダの作品に繰り返し登場することからもわかる。『壇』の後半部に、リンコの弟ジョージの愛犬がスターに銃殺されるという事件の直前、「マキシーが吠えているのを聞いたとき、私はクリスタル・プランジでタミと私がプールに入れてもらえるという本当にいい夢を見ている真っ最中だった」(78) という描写があるが、このことは、リンコがプールに入ることを夢を見るほどに、この一件が彼女の心の傷として深く残っていることが示されている。

リンコやジョージに侮蔑的な言葉を発して威嚇していたスターは、彼女の母が、家政婦をやめてクリーニング店という同業者になったとき、ツジムラ一家全体を対象にいじめだす。彼は、郵便受けに「ジャップランドリーは、ここから出ていけ、さもないとひどい目にあわせるぞ」と黒く太い文字で書かれた脅迫状を入れる。ちょうど、日本から遊びに来ていた母の妹ワカは、日本人がいじめられていることの理解に苦しんで、何故、このように脅されなければならないのかと問う。リンコは、「私たちが日本人だからだと思う。たくさん的人が日本人を憎んでいるの」(62) と答える。11歳の少女が、「憎まれている」と感じるほどに、日本人に対する激しい人種差別が行われていたのである。

スターのいじめは増幅される。脅迫状の投函後数日して、真夜中に誰かがやってきて、父親の車のタイヤ全部を切り刻む。次に、父が車で洗濯物を回収しようと得意先を廻ると、置いてあるはずの場所に洗濯物は一切見当たらない。スターが先を越して持っていくのである。父は、回収の方法を変えてこれに対抗することにする。しかし、スターの行為は一層悪化し、彼は、真夜中に忍び込んで来て、ジョージの愛犬マキシーを銃殺するという残忍な行動に出る。

マキシーの埋葬後、真夜中に、ワカやシュガー夫人も加えてツジムラ家の皆が居間に集まる。スターの仕打ちに誰もが言葉を失っていたが、ワカが、スターの一連の嫌がらせの原因はどこにあるのかと問いただす。そのため、リンコの父は、改めて、これまでの白人アメリカ人からの日本人への差別の歴史について語る。「野蛮人」や「黄禍」と呼ばれ、通りを歩いているだけで、石や馬の糞を投げつけられること、移民を制限する法律が作られ、土地の所有を禁じられ、アメリカ市民にもなれなかつたことなどである。自分がアメリカにやって来た1918年に、「ジャップは出ていけ。ここは白人が住む場所だ」と看板が掲げられたこともあった。父は、自分がアメリカでは、皆が平等にチャンスを得ることができると信じ、夢と希望を抱いてこの国にやってきたのに、この看板に大変なショックを受けたという体験について語った。

しかし、パパは、この長い差別の歴史を皆に伝えた後で、大学を中退して働くとしている長男のカルに向かって、「だが、俺たちはどんなことがあってもあきらめなかった。差別されればされるほど、いっしょうけんめい働いた。いつかきっと良くなる、俺たちの時代にはだめでも、子供たちの時代にはと、希望を持ち続けた」(82-83) と言う。リンコはこの言葉を聞いて、パパはアメリカから愛されることはなくても、アメリカを愛していること、7月4日の独立記念日には大きなアメリカの国旗を掲げ、いつか許可されることがあったらアメリカ市民になりたいと思っていることを読者に語る。しかし、父のこのようなアメリカへの愛国心に対して、やがては強制収容所に送られるという悲惨な結末が待っているのである。

このように差別をされながらも、一世たちは、アメリカの地に溶け込もうと努力しているのだが、

彼らの暮らしは決して楽ではない。父の理髪店も不景気から家賃を5ヶ月間滞納していて、家主は家賃を払わなければ電気や水道を止めると言う。11歳のリンコが「どうして、また、タノモシ（頼母子）からお金を借りないの？」と聞くのだが、日系人の経済がこのシステムに大きく依存していることや、地元の銀行は日本人にはローンを組んでくれないことが彼女の語りで伝えられる。毎日日々の暮らしに追われている一世にとって、アメリカ国籍を持つ二世に期待する気持ちは大きく、子供たちへの教育こそが最も重要なである。自分たちの苦労を繰り返させたくない、アメリカで高学歴を身につけて、学業が生かされるような職業に就いてくれればと子供たちに願う。それ故に、大学の授業料をアルバイトで稼いでいる長男のカルが、夏休みに働いて得た金を父親に送ると言ったとき、リンコの両親は、声を揃えて即座に「そんなことする必要は全くなき」「稼いだお金は授業料や秋学期に大学で必要になる費用に使わなければならない」と言う。父親はさらに「お前の教育よりも大切なものは他には何もない……このことは決して忘れるな」(27)と諭す。

しかし、このような両親の願いにもかかわらず、カルは、夏休みのアルバイトから戻って、ワカおばさんの歓迎パーティに出席したとき、大学を辞めて働くと宣言する。彼は、父の床屋も母のクリーニング店もうまくいってないことを知って、このような結論を出したのである。彼は、スーパーマーケットで働く際に学歴は必要ない、大学を出ても日本人の技師などどこも雇ってくれないので、と日系人への差別のために自分の将来はないのだと両親に訴えるのである。しかし、父は、次のように宣言する。

California,……there's nothing in the world more important for you now than getting a good education……Don't you realize that's the only thing that can bring you the kind of life your mama and I couldn't have? That's all we want from you, Cal. Not your money. Don't you see? (74-75)

ここには、一世である自分たちのような苦労を二世にはさせたくない、そのためには、高等教育が絶対に必要だと固く信じる親たちの心情が伝えられている。ワカおばさんも、「そうよ、カリフォルニア、夢を追うことをやめてはだめよ」と口をはさむ。母も、リンコとジョージを見ながら、「あなたたち子供は、決して夢を捨てないように」と諭す。

『夢』の後半部には、白人からの差別に耐え忍び、目立たないようにと、見えない存在であり続けようとした日本人が勇敢に変身する姿が描かれる。スターの陰湿ないじめが続いた後、ワカおばさんの助言に従って、リンコの父と彼の親友のカンドおじさんがスターに直接会って対決することになった。「あなたと同じように、私たちもクリーニング店をやっていく権利は持っています」と父は言い、「あなたたちはパークレーの町全体を所有してるわけではないでしょう」と、カンドおじさんが迫る。これに対し、「日系人たちは皆、安い労働力と安い賃金で働き、白人たちの邪魔になっている。さっさと故郷に帰ってくれ」とスターが反撃する。しかし、父は、落ち着いて「私たち日本人は確かに勤勉です、これを禁じる法律なんてありませんよね」と答え、カンドも「スターさん、競争するのがそんなに恐いんですか？　この国では皆自由に自分の目的を追求していくことができるんですよね」と確認を求める。

父はさらに、ジョージの愛犬を銃殺したスターを責め、「私たちは決してあきらめない。あなたの邪魔のおかげでますますクリーニング店の経営に身を乗り出す気になりましたよ」と明言する。この対決の一部始終を、弟と一緒に隠れて見ていたリンコは、スターが二人の勢いに負けて沈黙したのを見て、今日のような直接交渉を提案したワカおばさんとシュガー夫人が正しかったのだと確信する。皆で帰路についたとき、後ろを振り返ってスターの敗北者としての情けない表情を見たりンコは、「私が生きている限り、スターのこの表情を忘れないようにしよう。これからは、私もそ

してみんなもスターを恐がったりはしない」と読者に語る。

このようにして、ツジムラ一家に白人からの嫌がらせに直接抗議することを提案したワカは、日本に帰国する前に、リンコやタミに一世の人たちがいかに勇敢であったかを教え諭す。二人がワカにカンダおじさんと結婚してアメリカに残って欲しいと頼むのだが、ワカは、「外国人、邪魔な存在、劣等な人たち」と蔑まれるような場所で生きていくぞうにはないと断る。リンコは、このとき、「でもパパとママは生きてきたんだよ」と言うのだが、ワカは、次のように述べる。

..... because they are strong. They've endured because they have patience and courage, Rinko. And they've managed to hold on to their Japanese selves. (107)

このワカの言葉に含まれている「強い」(strong)「耐える」(endure)「忍耐」(patience)「勇気」(courage)という表現はウチダの作品で、一世たちの勇気を称える際に繰り返して使われる。確かに、19世紀の末から20世紀初頭に日本からアメリカに渡った一世たちの、これらの言葉に凝縮されるような行動があったからこそ、その後の日系アメリカ人たちがアメリカで確固たる地位を築くことができたのである。そのため、彼らの残した業績の大きさは計り知れないものがあるといえる。

リンコはワカのこのような両親への賛辞の言葉を聞いて驚く。何故なら、二世のリンコの目に写ったそれまでの日頃の両親の様子には、これらの言葉で称えられる資格があるようには思えなかったからだ。「勇敢で、強い」のは、両親ではなく、日本からやって来たワカおばさんの方だと感じていたからである。しかし、リンコはワカのこの言葉に説得されて「結局、パパとママが勇敢だったのかもしれない」と思うようになり、ここにそれまでのリンコとは違った彼女の成長した姿を垣間見ることができる。

## 2. 寛容で心やさしい白人たち

リンコが、シュガー夫人と呼んでいるMrs. Sugarmanは、リンコが何か相談事があつたり楽しいときを過ごしたいと思うときに、気軽に訪ねる隣人で、その名のとおりにやさしい白人である。いつも手製のケーキやクッキーでリンコをもてなしてくれるし、ワカおばさんを歓迎するパーティには、2段のケーキを焼いて持ってきててくれる。リンコが、母の地下室を利用したクリーニング店の開店について報告すると、シュガー夫人は、古くなった洗濯機を譲ってくれる。スターによるクリーニング店への陰湿な商売の邪魔を知ると、穏やかなシュガー夫人には珍しいほどの激しい調子で怒りを顕わにして、警察に訴えることを勧める人でもある。

シュガー夫人が他の白人アメリカ人とは違い、人種差別をすることとは無縁の、寛容な人物であることが示唆されている場面がある。ツジムラ家では、キスをしたり抱き合ったりする習慣がないため、しばらく家を空ける兄のカルに抱きつきたいが、逡巡しているリンコを見て、シュガー夫人が、「日本人は私とは違ってあまり抱き合ったりしないわね。でも、それは変なことじゃないのよ。人が誰かに愛情を示すのには、いろいろな方法があるもの」(39)と諭す。彼女のこの言葉には、民族の多様性を自然に受け入れている寛容な精神が表れている。

夫人は、ジョージの愛犬がスターによって銃殺されたときも真夜中であったにもかかわらず、すぐに駆けつけて、血まみれになってマキシーの屍骸を抱きしめているジョージを見て、「ああ、なんて可哀想な私の可愛いジョージ、あなたの愛するマキシーに誰がこんなひどいことしたの」と心から同情する。マキシーを埋葬した後、皆で集まっているとき、ワカおばさんがスターのような大きなクリーニング店が何故、ツジムラ家の小さなクリーニング店をこれほどまでに嫌がるのか理解できないと言うと、リンコが「私たちが日本人だから、憎んでいるんだよね、パパ」と答える。す

ると、シュガー夫人はリンコの手を強く握り締めて「スターのような馬鹿で狂信的な連中だけよ」と答えてくれる。彼女のこの言葉には、アメリカ白人の中でも、日系人に対して差別をするのは少數の人たちであり、大多数の人はシュガー夫人のように人種が違っても人間として対等に交流していこうとしていたのだということが示されている。

リンコの父が修理工場を開業すると、真っ先に仕事を持ってきてくれるのもシュガー夫人である。ワカが日本に帰る前の晩、シュガー夫人はワカとツジムラ一家を招いてお別れパーティを催してくれ、最上の食器で最上のものでなしをしてくれる。さらに彼女はワカにビーズの小銭入れを贈り、何度も抱きしめて、ワカに会いに日本へ行きたいとさえ言うのである。

日系人を差別することなく、親切に接してくれる白人はシュガー夫人だけではない。例えば、リンコの母親が家政婦をしていたフィリップス夫人は、リンコが父と一緒に母のクリーニング店の洗濯物を集めにまわっていると「お母さんにとっても会いたがっていると伝えて」と言い、父が洗濯物が盗まれていると告げると「そんなひどいこと、誰がしてるの？」と同情し、父が、スターの悪質なやり方に対抗して、スターの店が閉店後の時間に集配時間を変えたいと伝えると、快く協力してくれる。フィリップス夫人以外の顧客もまた、母の営む小さなクリーニング店に協力してくれる。このため、父はスターの陰湿ないじめにもかかわらず、「木曾の御岳さん」を口ずさめるほどに気を取り直すことができるのである。

このように、アメリカ白人による日系人差別を強調する日系人作家が多い中で、ウチダだけは、例外的に限りなくやさしく寛容な白人を作品に繰り返し登場させている。長編『写真花嫁』においては、シュガー夫人と同様にディヴィス夫人が主人公一家の友人として登場する。彼女は、真珠湾攻撃後に日系人たちが強制収容所へ送られたときも変わらない友情を示してくれる。日系人たちを支える市民グループに参加し、炎天下に2時間も並んで強制収容所に差し入れをしてくれるのである。

ウチダの、このような他の日系人作家たちは違うアメリカ白人の描き方は、彼女のどのような考えに由来するものなのかは、リンコものと同じ11歳の少女ユキが主人公になるユキ二部作の完結編である*Journey Home* (1978) の一節にうかがえる。このユキものは、一部の*Journey to Topaz* (1971) というタイトルからもわかるように日本人や日系人たちの強制収容所体験を描いたものである。ユキにもリンコのように兄のケンがいるが、ケンは、日系二世部隊に志願し、負傷して足が使えなくなる。ケンの悩みは、自分の一生使えなくなった足ではなく、親友のジムの戦死であった。ジムは、防空壕にいたケンや仲間を救うために手榴弾におおいかぶさって死んだのであった。ケンは、自分が生きて帰ってきたことで自分をも許せないでいる。ケンは、このことを父の友人のオカに打ち明けたとき、泣きながら「畜生、戦争なんて愚劣だ、くそくらえだ」("Damn, stupid, stinking war!")<sup>5)</sup>と叫ぶ。このように戦争がいかに悲惨な結末を迎えることになるのかをウチダは読者に訴えている。

このユキものにおいても、多くの寛容で心やさしいアメリカ白人が登場する。ユキ一家の隣人オルセン夫妻は、トバーズから戻ったユキの一家を感謝祭の食事に招待してくれる。オルセン家の暖炉の上には若い青年の写真が飾ってあった。オルセンは、「息子のジョニーだ、ちょうど君と同じくらいだろう」とケンに言う。そして、このオルセンの息子のジョニーが硫黄島で戦死したことが明らかになる。これは、アメリカ白人の息子もまた、戦争の犠牲者になっているということや、戦争では、一方ではなく双方が傷ついているのだということを伝えようとするウチダの姿勢が感じられる。

さらにウチダの主張は続く。一世であるために、大変な苦労をして強烈な差別を受けたオカは、アメリカ白人を憎んでいる。感謝祭の日は、珍しくオカもオルセン家を訪れているのだが、オルセンは、オカに「もう私たちを許してはくれませんか……私をふくめた白人すべてを」と言う。オカ

は驚いて「あなたのひとり息子を殺した相手を、あなたは許せますか」と聞くと、オルセンは「もう許しています」と答える。そして、オカは次のように考える。

…… “Forgive…” he murmured. The word came slowly and softly from his lips, as though he were understanding it for the first time. He spoke the word as a blind man might feel a new object , touching it, discovering it, wondering about it, amazed at the feeling that came alive as he said the word. (125)

ここでは、アメリカ白人を憎み続けていたオカが「許し」という言葉を聞き、自分が知らなかつた世界に目覚めたことがわかる。ウチダが作品の中でこのように、「許し」について繰り返し述べるのは<sup>6)</sup>、彼女が深くキリスト教を信仰していることに由来していると思われる。この「許し」という姿勢を持って、日本人や日系人たちが強制収容所へ送られたことについても、対処していくべきではないだろうかということを示唆しているのだ。

そして、ウチダは、リンコものやユキものに、多くの寛容で心やさしいアメリカ白人を登場させることで、日系人たちの長年にわたるアメリカ白人に対する憎しみの感情を和らげたいと望んだのではないだろうか。しかし、時代の趨勢の中で公にこのような発言をすることは、他の日系人たちから反感をかうことにもなったであろう。そのことを憂えて、ウチダは、児童文学というジャンルを選び、同世代というよりはむしろ、次世代の日系アメリカ人たちに、人種の差を越えてお互いを受け入れることの大切さを教えたいと願ったように思える。

リンコのような純真な少女にとって、学校のクラスメートやスターのような人種差別主義者たちからいじめられたことは、計り知れないほど大きな心の傷を負ったに違いない。しかし、それだからこそ、シュガー夫人のような愛情あふれたアメリカ白人の存在の偉大さが浮き彫りにされるのである。そして、リンコは相談相手となってくれるシュガー夫人に助けられて、成長していくことができる。

### 3. 故郷日本の文化と日系人同士の絆

シュガー夫人のような寛容なアメリカ白人の友情に支えられてはいたが、人種差別を受けることの多かった日系人たちは、アメリカに暮らしていながらも、日本の風習や文化を決して忘れないようにして心の平静を保っていたように思われる。さらに、日系人同士が緊密に交流していくことで、仲間としての団結力を育み、多数派のアメリカ白人に立ち向かおうとしていたのではないだろうか。

ツジムラ家では、主食は米であり、リンコは母から米の研ぎ方や水の量までしっかりと伝授されている。皆自分の箸を持ち（父は象牙の箸、リンコは赤い漆の箸）、母は漬物を日本風に漬物石を載せて漬け、父は必ず母手作りの漬物をのせたお茶漬けで食事を終える。一家がピクニックに行くときも握り飯と漬物がランチとなる。

ワカが日本からやって来るときも、正月を迎えるときと同じように、大歓迎する。母がワカのために作る料理は、おせち料理であり重箱に詰める。ワカの日本からのおみやげも日本の香りが漂う物ばかりで、新茶、せんべい、海苔、干し椎茸、鰯節などである。自分自身の息子を、2歳のときに失い、次いで夫も失ったワカにとっては最愛の姪であるリンコに対しては、自分で縫った着物を持参する。

アメリカ人でありたいと常日頃思っているリンコは、最初、この着物を着るのを嫌がるのだが、2ヶ月後、ワカを好きになるために、着物を着て写真撮影に同意する。このとき、リンコは、「縫

い目通りにきちんと畳むと皺にならない」「背が低い人は、おはしょりを多めにとれば良い」と着物の利点について述べる。さらに、着物を着るとき、女性は左前にすること、帯びや、足袋や、草履についても説明する。

また、リンコの母は掃除をするとき、埃が散らばらないようにと、湿ったお茶の葉を床に撒くことも紹介される。ワカが、リンコの兄のカルに対しては、父親に対するのと同じように恭しく接することについては、語り手のリンコが「カルが長男であるから」「長男であるということは日本ではきっととても大切なことなんだ」と思う。

このように、ウチダの作品では、一世の日本人が大切に守り続けてきた日本の文化や風習が必ず紹介される。このことは、白人の子女を含めてアメリカの少年少女たちに日本の文化を知らせることになり、日本という国について理解を深めさせることになったに違いない。ウチダの作品が全米の小、中学校の教科書に採択されており、ドイツ語やロシア語に翻訳されている<sup>7)</sup>ことを考えれば、二世作家ウチダの少年少女たちの国際理解に果たした貢献度は大きいように思われる。

文化や風習に加えて、日系人たちが保ち続けたことは、同郷の人たちとの友情やお互いを支え合おうとした精神である。リンコが、カンダおじさんと呼んで慕うカンダは、リンコの父の親友で、二人は日本から同じ船でアメリカにやってきた。カンダが毎日曜日にツジムラ家を訪れる事からも家族同様に親しく述べていることがわかる。独身のカンダは、「何よりもお金が好きな」「けち」と噂されているが、彼には悲しい過去がある。写真花嫁として日本からやってきた女性が、初めて会った二日後に窓から飛び降りて自殺してしまうのだ。このとき、カンダの髪が1日で真っ白になったという逸話をリンコは知らされている。それまで一度も会ったことのない男女が写真一枚で結婚するこのシステムにおいては、写真が現在のものではなく、若いときのものであったりすることから、夢と希望を抱いて米国に到着した花嫁が、現実の花婿との様々なギャップに驚き、逃亡したりすることもあったというから、カンダの許婚も絶望して自殺してしまったのかもしれない。

しかし、カンダは、世の中に恨みを抱いて生きる守銭奴では決してなかった。リンコの父が床屋を閉めて、自動車やその他のものを修理する仕事を始めようと決意すると、「二人で太平洋を渡って来て以来、ずっと一緒にやってきたじゃないか、君の新しい計画に協力したい」と述べて、老後のために貯蓄していた金を投資したいと申し出る。

カンダは腹ベルトに貯めていた全財産の現金である20ドル紙幣を500ドル、リンコの父に差し出す。「一緒にやっていこう」と二人で喜びあう姿を見て、リンコは二人がお互いのことを思い合い、お互いを信頼し合っていることを確認する。30年代という不況の時代に500ドルという大金を貯め、しかもそれを親友とはいえ他人に手渡してしまうというこの逸話は、アメリカと一緒にやってきた日本人たちがいかに大きな友情で強く結ばれていたかがうかがえるものになっている。

このようにリンコの父と友情を育み続けたカンダであるから、ツジムラ家の子供たちを自分の子供のようにして彼らに愛情を注いでいる。日本人一家にとって大切な存在である長男が生まれたときも、カンダが名付け親となってリンコの兄をカル（カリフォルニア）と命名する。そのため、カンダは、カルが、大学を中退しようとするときも、長距離バスに乗ってカルの説得に出かけていくという行動に出るのである。

こうして、リンコは、親が教えてくれた日本の文化や風習から、そして、親たちが大切に育んでいる一世間の友情から多くのことを学び成長していくのである。

#### 4. リンコの成長を助ける大人の女性たち

シュガー夫人やカンダおじさんに加えて、母やその妹のワカおばさん等、大人の女性たちもリンコに影響を与える。リンコの母もまた、写真花嫁として父と結婚した。母はアメリカにやってきた

当時を振り返り、エンジェル島の移民局で苛酷な仕打ちに会い、4日間も拘束され毎晩移民局の簡易宿泊所で泣き暮らしたことをリンコに語る。

リンコの母も、『写真花嫁』の主人公ハナや親友のキクたちのように強靭な精神力の持ち主である。父が経営する理髪店が経営不振に陥ると、それまで通っていた白人家庭での家政婦をやめてツジムラ家の地下室でクリーニング店を始めると提案し「今まで力仕事に音をあげたことは一度もないでしょ」と夫に迫る。ウチダの作品において、リンコの母親を始めとする頻繁に登場する写真花嫁たちのモデルは、ウチダ自身の母親である。リンコの母やハナも、ウチダの母のように女学校出身の教育を受けた女性で、教師になることを夢みていた。しかし、女性が自立することが難しかった日本では実現することのないまま年を重ね、やがて、写真花嫁の話が持ち上がり、新しい可能性を求めて海を渡る決心をする。このような一世女性ではあったが、新天地アメリカでは、日々の生活に追われて夢をかなえることは不可能であると実感する。そのため、彼女たちは自分の娘にその夢の実現を託すことになる。『壇』においても、リンコが、母の夢を引き継いで教師になることを夢seeingしている。

自分の夢を賭けてアメリカにやってきたこれらの女性たちは、当時の「新しい女性」「自立を望んだ女性」ということができ、リンコにもこのような意志の萌芽が育っていく。彼女は、母が家政婦をしていた家の白人女性主人から、「お母さんに会いたいわ。また戻ってきてと伝えて」と頼まれることがある。このとき、彼女は、「誰かのために家事をするよりは、自分の洗濯屋で自分が働く方がいい」と考えるのだ。ここには、幼いながらも、白人女性のための家政婦よりは、自分自身で仕事をしていこうという母の自立した精神を大切に思う姿が示されている。

母の妹のワカは、息子や夫が病死し、現在は、リンコの祖父母と暮らして、薬局を営む祖父を手伝っている。ワカもまた、女学校を出た教養ある夫人であることは、シュガー夫人に片言ではあるが英語で話しかけることからもわかる。リンコにとって、ワカは「いつも私を驚かせる」存在である。何故なら、日本女性はおとなしくてはっきりと発言しないと聞いていたが、ワカはいつもはっきりと物を言い、物事の白黒をはっきりさせたがる人だからである。母や、差別されて自信のない自分と違って、ワカはいつも勇敢である。

そのため、スターに次々に嫌がらせをされてツジムラ一家が困惑していたときも、ワカは、スターに直接抗議しに行くことをすすめる。彼女の提案に皆驚くが、結局それが最良の策であると結論づける。しかし、リンコの母はひどく心配して、父に向かって「もしもあなたが撃たれたら」と弱気になる。一方、ワカは、「強気になって自分のために立ち上がる」ことの必要性を説く。このようなワカについて、リンコは日本から来て間もないワカの方がアメリカで暮らすツジムラ一家には見えないものが見えるのかもしれないと考えるのである。結局、父はカンダと一緒にスターを訪ね、あっけにとられて何も言えないスターに勇敢に立ち向かい、言いたいことをすべて言うことができる。

スターとの対決後の日曜日、皆が揃う夕食の席で、父はワカがすすめてくれたおかげで、スターと直接向きあう勇気が持てたとワカに礼を述べる。さらに、「ワカさんが言ってくれたように、私たちはチャンスを逃さず、行動に移すことが大切で、そうしないと一生夢はかなわない」と述べる。そして、父は、この席で、床屋を閉店して以前からの夢だった修理工場を始めたいと宣言する。このときも、不安そうな表情を示す母とは対照的にワカは「シンタロウさん、あなたならできますよ。とにかく始めること、そうしないと、できるかできないかもわからないもの」と後押しされる。

このように意志の強い自立した女性であるワカを好きになったリンコは、親友のタミと一緒に、ワカに、アメリカに残ってカンダおじさんと結婚するように勧める。しかし、ワカは二人に「私が生きる場所は、夫や息子が眠っていて、リンコのおじいさんやおばあさんが住んでいる日本なのよ。そして最も大切なことは、日本でならば私は私らしいられるでしょう」と言ってきかせる。彼女

のこの言葉は、写真花嫁として太平洋を渡ってきた姉とは違い、自分は故郷の日本に根をおろして、生きていこうという決心を語っている。リンコは、母が屋根裏の日本から持ってきたトランクに日本での思い出の品々を閉まっていることを思い起こす。母は、日本人である自分を閉まって暮らしているが、自分らしさを閉まつたりすることはできそうにないワカの気持ちが理解できる。

こうして、リンコは写真花嫁としてアメリカで暮らす母や、日本人として日本で一人で生きるワカの生きる姿勢を通じて、大人の女性になるための第一歩を歩んでいく。

## 5. リンコの成長への過程

ツジムラ一家は、ワカの提案のおかげで、スターと向き合うことができるようになった。父とカンドおじさんの勇敢に交渉する姿を影に隠れて見ていたリンコは、このときの一部始終を母やワカに報告した後で、自分の部屋に行き「自分が変わったか」を確認しようと鏡を眺める。何故なら、リンコは、今回の一件が余りにうれしいことだったので、「きっと自分は変わった」「少し成長できたかもしれない」と感じたからである。

鏡の前で、前かがみにならずに背を伸ばして立ち、自分をじっと見つめると、「自分はきっとなんでもできるんだ」と自信が持てるようになるのである。そのため、リンコは、この事件以来すべてを「B.W.S.」（ウィルバー・スター以前）「A.W.S.」（ウィルバー・スター後）というように区別しようとするほど、この一件に大きく影響を受ける。そして、彼女は、ケチだと噂されていたカンドおじさんが500ドルという大金を父の修理工場の開店費用として投資したとき、「A.W.S.」は、自分だけではなくカンドおじさんまでが「変容した」のかもしれないと思う。

リンコが実際に変容したことは、遠方のカルを訪ねた後で交通事故に会ったカンドに呼ばれて病院に一人で出かけたときに証明される。看護婦が、意地の悪いアメリカ白人が良くそうするように、リンコの問い合わせにも応じず、彼女を無視する。リンコは、母と二人でデパートに出かけたときも売り子が、白人客の応対を全て終了してから渋々応対してくれたり、リンコが一人で出かけると、完全に無視されることもあったから、無視されることには慣れていた。しかし、リンコは、このときも、スターの一件を思い起こし、勇気を奮い起こして、看護婦にカンドと面会したいとはっきりと言うことができるようになる。

カンドは、遠方にいるカルを訪ねて、彼に退学をしないようにと説得しに行った帰りに交通事故に会ったのだが、リンコを呼びつける。彼は、事故から間もないこともあって、意識も朦朧としているのだが、「まだ、『大学に行く』壇は持ってるよね」とリンコに確認し、カルからリンコにも教師になる夢を捨てないようにという伝言を託されたことを伝える。「リンコ、決してあきらめないようにね」とカンドに言われて、リンコは「絶対にあきらめないよ」と語り、カンドを安心させる。そして、リンコは、スターの一件以来自分が、確かに変わったということを次のように語るのである。

Ever since that day we went to see Wilbur Starr, I had this feeling sitting deep down inside me that I could do almost anything. It wasn't quite as strong as it'd been that day, but I knew it was still down there like a little mushroom, waiting to grow bigger one of these days. (118)

ここには、スターの一件以来、リンコが、「自分は何でもできる」という自信が持てるようになったことが述べられている。

やがて、ワカが去るときになって、リンコの成長は一層強められる。8月中旬にワカは2ヶ月の

滞在を終えて日本に帰る。ワカは、リンコに手製の着物を着せて、祖父母のために記念写真を撮る。着物を脱いでほっとするリンコにワカは、「あなたは本当にアメリカの子なのね」「でもこれからも着物を着ることはなくともあなたには日本人の血が流れていることを忘れないでね」と言う。リンコは、「わかってるよ、でも、この私の日本人である部分が、他の人たちとは違うとか、劣っているとか思えてくるところなの」と答えるのだが、このとき、リンコは、「最も不思議な」ことに突然、「自分の頭の蛇口を開けて、そこにたまっていたこと全てを吐き出す」ような体験をする。

それは、リンコが、学校でどのような毎日を過ごしているのかとか、男の子にいじめられ、女の子からは仲間はずれにされているという実態をワカに打ち明けてしまうことである。さらに、リンコは、今まで誰にも言えなかった自分だけの秘密をワカに伝える。母が、先生たちにおじぎを何度もして「おかしな」英語を話すのが恥ずかしいから、PTAの通知を破いてしまったという秘密である。リンコは、「人と違うこと、仲間はずれにされること」がひどく嫌なのだとワカに訴える。

リンコからこのような秘密を打ち明けられたワカは、やさしい態度でリンコに接し、自分も子供時代に足が不自由であったためにいじめられたことがあり、リンコの気持ちが良くわかると答えてやる。そして、「あなたが他の人たちと違っているからといって、あなたがその人たちよりも劣っていることにはならないのだから、自分を嫌いになったりしてはダメよ」(125)と言いつ、「いつかあなたは自信が持てるようになる、日本人の血が流れていることにもね」と付け加える。

ワカのこの言葉に、リンコは「頭の電気のスイッチがつけられた」かのように感じる。この瞬間に、リンコは、ワカが、「自分自身に自信を持ち、自分自身を好きで」「何よりも、今有る自分に誇りを抱いている」ことが彼女を素晴らしい女性にしているのだと悟る。そして、読者は、リンコの語りから、リンコ自身が自分に誇りを抱くことの大切さを知ったことを読み取ることができる。

ワカに日本に来るように誘われ、リンコが「日本に行く」壇に金を貯めることを計画すると告げると、ワカが、その壇を「夢をかなえる壇ね」と答える場面から、本作品のタイトルが取られている。ウチダ自身が1952年から2年間フォード財団の研究員として日本に留学していることからも、リンコの「夢」もやがては叶えられる日が来るだろう。

ワカを見送る波止場で、ワカを乗せた船がだんだん離れていくとリンコは大声で「日本に会いにいくよ!」と叫ぶ。そして、ワカと過ごした夏が、「自分の人生で、最も素敵な夏の一つ」だったことや、本当にツジムラ一家を変えてくれたのは、スターではなく、ワカおばさんなのだから、「ワカおばさん前」「ワカおばさん後」と考えることにしたことなどをワカに伝えたかったと思う。

リンコは、さらに、ワカと紙テープで結ばれながら、次のように、思いをめぐらす。

I guess Aunt Waka had stirred us up and changed us all so we'd never be quite the same again. I was really beginning to feel better about myself—even the part of me that was Japanese—and I almost looked forward to going back to school to see if maybe things would be different. (130)

ここには、ワカが、ツジムラ家全員を変容させたこと、とりわけ、リンコがそれまでの劣等感から解放され、学校においてさえ自分を変えていく意志に燃えていることも述べられている。ワカに会うまでは、自分の「日本人」である部分を好きになれなかっリンコが、ワカと会ったために変容することができ、大人になる準備を終えたことがわかる。

こうして、見事にリンコは成長を果たすのであるが、『壇』を始めとして、リンコ三部作には、大人向け長編の『写真花嫁』や自伝やユキものなどの他の作品には見られない要素が含まれていることを付け加えておきたい。それは、三作品共に、心暖まるユーモアが散りばめられていることで

ある。ユキものとは違い、主人公の少女リンコ自身の一人称語りが読者に心暖まる雰囲気を感じさせるのだが、このリンコが大いに読者を笑わせてくれる術を心得ているのである。『瓶』では、日本から届くワカおばさんの手紙が、気候のことから始まり、「皆さんお元気ですか」に至って、祖父母のことなどを延々と書き、やっとのことで彼女自身の要件のことを書く習慣があるので、父親が最初の数ページを飛ばし読みする場面をリンコがおもしろおかしく語る。

リンコの弟のジョージについて語るとき、リンコの語りは饒舌になり、多いに読者を笑わせてくれる。客を招いた食事の席で、ジョージは、自分の皿に、飯と肉と野菜が「お互いにぶつからないように」きれいに仕訳して、ひたすら食べ、一言も口をきかないという様子がおかしい。リンコの親友のタミは男女の縁結びに奔走する母親譲りの世話好きで、このタミを始めとして、脇役たちの行動も読者を十分に笑わせてくれる。リンコはタミと相談して、ワカおばさんとカンダおじさんを結婚させようと計画する。結婚を成立させることに命をかけているタミの母親も笑える存在であるのだが、タミは母親の影響を受けて、夕食の席でワカがカンダと言葉を交わすたび毎に、リンコのひじを突いたり、足を蹴ったり、ウィンクしたりする。タミは余りにあからさまで、「お母さんと同じくらいひどく」なるとリンコが語る。

リンコものが、ウチダの作品の中で特に異彩を放って優れていると思える点がもう一つある。それは、ときに、リンコの語りが読者に感動を与える詩的な美しさを帯びるときである。例えば、バークレーの白人居住区域から見える景色の美しさを称える場面である。母が家政婦をしていたフィリップス夫人宅からの眺めの美しさを家族に伝え、次の日、皆でそれを見に行くことにする。日本人居住区からは決して見ることはできないであろう美しい光景にリンコは感動するのである。

She said she watched the sun sink like a red balloon right into the bay, and the sky turned all gold and pink and lavender. And the very next day she had Papa drive us all up to the hills so we could see the sunset for ourselves. Mama was right. It really was beautiful, and I stared hard so the colors would sink into my eyeballs and my head and stay there forever. (63–64)

この文章の直後には、丘の上にはないリンコの家からは、サンフランシスコ湾は全く見えないことが記されている。リンコが、自分の家からは見ることのできない眼前に広がる美しい光景を、永遠に心に焼き付けておきたいと願う心情に読者は心を動かされる。

『壙』の最終場面は、このようなリンコの叙情的な語りで幕を閉じる。日本行きの船に乗るワカと青いテープでつながるリンコの語る別れの儀式は詩的な美しさを醸し出している。

There must've been hundreds of pink and yellow and lavender and blue streamers all tangled up and billowing in the breeze. It was so beautiful and sad—— I stood there a long time watching Aunt Waka's ship going further and further away from me, until finally my blue streamer was all unrolled and went flying off into the summer sky. (129–131)

### 注

- 1) 山本秀行、「日系二世の少女 Rinko の物語：日系アメリカ人作家Yoshiko Uchida の Rinko物語」3作品を読む」『鹿児島県立短期大学紀要』第44号（1993），45–64頁。45頁参照。
- 2) ウチダの自伝的情報については、拙論「受け入れることと許すこと——ヨシコ・ウチダの『写真花嫁』」『東京成徳短期大学紀要』第34号（2001）53–60頁を参照。

- 3) *English Street: Reading* (第一学習社, 1995年), Lesson 17 “Why I Kept My Mouth Shut”, 212頁参照。
- 4) Yoshiko Uchida, *A Jar of Dreams* (New York: Aladdin Paperbacks, 1981), 5.  
以後, 引用は( )の中に頁数を記す。日本語訳は拙訳である。必要に応じて原文も記載した。
- 5) Yoshiko Uchida, *Journey Home* (New York: Aladdin Paperbacks, 1978), 118.  
以後, 引用は( )の中に頁数を記す。日本語訳は拙訳である。必要に応じて原文も記載した。
- 6) ウチダの訴える「許し」については, 上述注(2)の拙論に述べた。
- 7) 植木照代, 「ヨシコ・ウチダ」『日系アメリカ文学: 三世代の軌跡を読む』(植木照代, ゲイル・K・佐藤編著 創元社 1997), 31頁参照。